巻頭言

パルクールの実践と研究
最先端の身体文化／スポーツの発展と理解を目指して

The Practice and Research of Parkour: Towards the development and understanding of an advanced physical culture/sport

本特集はアーバンスポーツ研究会が2021年3月10日にオンラインで開催したワークショップ「パルクールの実践と研究 : 最先端の身体文化 / スポーツの発展と理解を目指して」で報告された3名の登壇者の講演録と研究会メンバーの論稿2本から構成されている。まず、特集の内容を紹介する前に、私たちのアーバンスポーツ研究会について、紹介させていただきたい。

本研究会は立命館大学人文科学研究所の助成プログラムの支援を賜り、2020年から活動を開始した。ただ、本研究会は、同じく立命館大学人文科学研究所の助成プログラム「2019年度若手研究者研究支援」を頂いた「ライフスタイルスポーツ研究会」が母体となっている。この「ライフスタイルスポーツ研究会」は、ワークショップで登壇いただいた石沢憲哉氏が運営するパルクールジム「Jump & Leap」への訪問調査を実施した。ここで同調査の概略とともに、調査に至る経過も付しておきたい。

ライフスタイルスポーツ研究会は、2019年11月から日本のパルクールの現状について調査を開始した。2019年11月に淡路島で開催された日本体操協会主催による初めてのパルクール全国大会の調査を行い、選手や観客にパルクールを始めた経緯やオリンピック競技化の是非についての聞き取りを行った。

その聞き取りをつうじて、日本では2005年頃に最初期のパルクール実践者が現れ始め、2015年以降に大きく増加していること、またここ数年、仙台から東京、大阪、沖縄といったさまざまな地域にパルクール専用のジムが

次々と作られてきていることがわかった。またこの全国大会にはジムの講師が選手として出場し、観客としてジム生が遠征して来ていた。そこで、パルクール普及にとってひとつの重要なハブとなるジムへの追加調査が必要であるという見通しを持った。

調査対象とした宮城県富谷市の Jump&Leap は、石沢氏が仏英のパルクール団体での学びをもとにつくった日本初のジムである。また石沢氏は日本パルクール協会の副会長でもあり、「自己鍛錬の文化」の思想を持ち、パルクールのオリンピック競技化に強く反対した関係者のひとりでもある。くわえて石沢氏は仙台近隣の小学校の体育授業にパルクールを組み込む活動も行っている。石沢氏とはすでに連絡を取っており、2019 年 3 月 11 日から 14 日まで毎日、ジムに滞在し調査をさせていただくこととなった。先にも述べたように、この調査の成果をふまえた 2019 年度内にワークショップを開催しようとしたが、COVID-19 の感染拡大をうけて見送られた。

2019 年度の成果を継承すべく、ライフスタイルスポーツ研究会は、新たなメンバーを研究会に加えて、アーバンスポーツ研究会と名称を変更し、2020 年度立命館大学人文科学研究所の助成プログラムの支援を賜り、研究活動を継続させることができた。研究会の名称を変更することにより、本研究会は、ライフスタイルスポーツのなかでもアーバンスポーツと呼ばれる都市型スポーツを、都市政策、都市開発、都市景観といった観点から、研究を進めている。これらの観点にもとづく本研究会の研究計画を簡潔に紹介したい。

第 1 に、都市政策の観光的側面としては、東京オリンピックはスポーツを利用した観光政策としては最大規模のものであった。また近年、国際オリンピック委員会は「都市のスポーツ化」という標語のともに、競技会場設営費が低コストであり、開催費を低減できることから、アーバンスポーツに着目している。この動向が競技場周辺の都市開発にも関わっていることから、大会開催地である有明アーバンスポーツパーク周辺の都市開発およびイベント観光政策としてのオリンピックを研究対象とする。

第２に、都市のスポーツ政策、健康政策的側面としては、アーバンスポーツは練習場／競技場増設が比較的安価で行えるため、低コストで健康とスポーツに対する万人の権利を保証できる都市スポーツ政策としての国外（デンマーク、イギリス、アメリカ）、国内の動向や事例を研究対象とする。

第３に、都市政策の空間利用に関わる側面として、ライフスタイルスポーツは、従来の近代スポーツが生活場面から隔離された均質な競技空間で行われるものであったのに対して、漁師が生活する海（サーフィン）や市民が生活する街中（スケートボードやパルクール）を練習／競技空間とすることから、日常的な生活空間を侵害しかねないという問題がある。

そのような衝突を回避しうるルール作りという問題だけでなく、都市空間の利用と専有に関する新自由主義思想による都市開発などの諸問題として、ルフェーブルの都市論やアーリの移動の社会学といった都市論の議論を批判的な研究対象とする。

また、アーバンスポーツ実践者と生活者、都市計画者のあいだの都市空間利用に関する権力関係を具体的な社会学的調査の対象とする。

第４に、都市景観の開発政策としては、パルクールやスケートボードの「クール」な運動ビジュアルは、都市イメージを演出するものとして、広告的、観光的な価値を期待されており、映画、YouTube といった映像メディアや雑誌、新聞、テレビなどの言説を通じて、アーバンスポーツが都市景観の一部として演出されている現象を研究対象とする。

以上のような研究計画のもと、本研究会は研究活動を進めてきたが、本特集に収録されたワークショップの３つの講演録と研究会メンバーによる２つの論稿は、上記の研究計画に基づいた成果となっている。

まず、ワークショップの講演録について述べたい。第１登壇者の平石貴士氏（立命館大学授業担当講師）による「パルクールの歴史と先行研究および宮城県富谷市における実践例」では、海外で進められているパルクールに関する人文・社会科学領域における研究動向を整理し、パルクール研究の視座

を整理し、その要点を確認している。平石氏は、パルクールを通じた都市空間に対する知覚の変容、パルクールを通じた社会化、パレスチナのガザ地区におけるパルクール実践、イギリスにおけるパルクールの制度化など、広範な研究論文の要点を巧みに整理し、紹介する。

第2登壇者の住田翔子氏（立命館大学産業社会学部准教授）による「パルクールと都市文化：都市のみかたとつかいかた」では、パルクールとその実践の場である都市空間の関係について、他のポピュラーカルチャー研究も援用し、空間の解釈や意味付与、また認知等の側面から検討している。特に、都市のシームレス化、都市の表面への身体的接触というキーワードをもとに、スケートボードやグラフィティなど、先行するストリート文化との比較を通じて、パルクール実践の解釈を試みる。また日本におけるパルクールの受容プロセスにメディア環境の変化が重なっていることに着目し、物理的な都市空間とインターネット上の空間とを行き来するパルクールの実践についても言及する。

第3登壇者の石沢憲哉氏（合同会社 SENDAI X TRAIN CEO）の「パルクールの新たな課題：ルーツとイノベーションの狭間を読み解く」では、日本におけるパルクールの早期実践者であり、現在、パルクールジムの経営者となった石沢氏のライフヒストリーを紐解きながら、今日のパルクールが置かれている状況について、教育との関係や課題もふまえた考察がなされている。なかでも、本稿のタイトル「パルクールの新たな課題」に示されたように、パルクール実践者として、日々体験し、葛藤しているパルクールをめぐる地域実践の難しさとライフスタイルスポーツ界におけるパルクールの可能性に、議論の力点が置かれている。たとえばこの点は、派手で華麗なトリックを繰り出し、フリースタイルに特化したエクストリームスポーツとしてイメージされるパルクールではなく、パルクールの新しい価値観を模索する石沢氏やジムに集う実践者の経験とその分析として示されている。

なお、ワークショップ当日の質疑応答をふくめた全体の「総括」は、本

ワークショップのコーディネーターを務め、当日の司会を担当した塩見俊一（立命館大学非常勤講師）による「【解題】パルクールという文化：注がれるまなざしと今日的課題」をご覧いただきたい。

次に、本研究会メンバーによる２つの論稿の概要を紹介したい。まず、平石貴士氏の論稿「パルクールの歴史をスポーツ空間のなかに位置づけるための歴史の素描：フランス、イギリス、日本の実践に触れながら」では、先の講演録で扱った英仏圏におけるパルクール研究の紹介を補足し、平石氏がこれまで行ってきたフィールド調査や文献調査に基づいて、上記の諸論文ではまだ扱われていない文脈も含めて、特に日本の状況を記述している。

つぎに、三谷舜氏（中京大学スポーツ科学部任期制講師）の論稿「パルクールジムにおける『環境の用具化』：パルクールにおけるスタイルと環境の考察に向けて」では、スポーツにおける「環境の用具化」を概念化することを目指し、パルクールを主なテーマとしてそこで生じている現象の力学や作用を整理する。三谷氏の論稿は、「ストリートでパフォーマンスする」パルクールの意義やメッセージに着目し、パルクールがジム等の室内で実施されるときに生じる課題を検討している。その検討を通じて、三谷氏はスポーツ技術論の観点から「環境の用具化」という概念を試論として提案している。

このように、今次の人文研紀要の特集号には、ワークショップ登壇者の講演録と研究会メンバーによる論稿を収録させていただくが、これらは本研究会の活動の成果である。たしかに、日本におけるパルクール研究は、平石氏の講演録や論稿が指摘するように、まだ始まったばかりである。しかし、これまでに発表されてきたライフスタイルスポーツ研究に学びながら、また、この特集を見ていただいた方々から、ご指摘やご教示を頂戴しながら、研究を進めていきたい。

最後に、これらの研究成果は、立命館大学人文科学研究所の運営に携わる教職員の方々の献身的なサポートなくして結実されることはなかった。この場を借りて、心より感謝申し上げる。

立命館大学非常勤講師　塩見　俊一（ワークショップコーディネーター兼司会）
立命館大学産業社会学部教授　市井　吉興（アーバンスポーツ研究会研究代表）